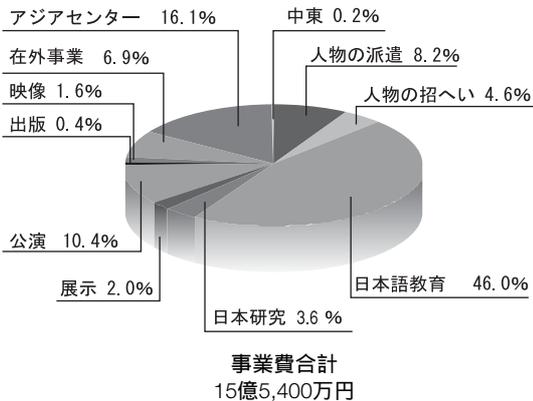


東南アジア

概要



東南アジアにおける事業実績額は約15億5,400万円であった。

2003年は、日本ASEAN首脳会議において合意した「日本ASEAN交流年2003」として、政治、経済、社会、教育、文化等さまざまな分野で、年間を通じて多くの交流が行なわれた。基金は「文化交流を通じた日本とASEAN地域の一体感の醸成」に向けて150件あまりの事業を実施した。

「J-ASEAN POPsコンサート」は、日本とASEANの若者がポップスを通じて相互理解を深める機会として、クアラルンプール、ジャカルタ、バンコク、横浜で計1万4,000人を動員した。そのほか「アジア漫画展」「表層を越えて：ものづくりにおける日本スタイル展」「Painting for Joy：90年代の日本絵画展」等の巡回展示を行なった。タイ英字紙『ネーション』のレビュー記事は、2003年における日本の文化交流事業が活発であったことを紹介し、「他の外国文化機関も日本のリードに触発されてしかるべき」と述べた。マレーシア・アクターズスタジオ芸術監督の招へい、劇場スタッフ養成ワークショップなど、今後の交流拡大につながり得る人材育成と共同作業にも努めた。

東南アジア各国文化の日本への紹介、各国と日本の多国籍間交流も継続的に実施している。日本国内で「東南アジア現代美術展」「東南アジア映画祭2003」「アジア in comic：アジア女流漫画の世界展」、開高健記念アジア作家講演会シリーズ「カンボジア女性作家パル・ヴァンナリーレアク講演会」を開催したほか、知的交流についてはアジア・リーダーシップ・フェロープログラム、東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)などを実施した。

事業実績額の半分以上を占める日本語教育では、教師研修の実施、教材開発への協力などのほか、教員相互の情報

交換やネットワーク形成の機会をつくるなど、地方を視野にいたした支援を行なっている。日本研究については、タイ・タマサート大学における「アジア諸国の日本研究に関する地域会議」「インドネシア日本研究機関代表者会議」などを支援した。基金が長年にわたり支援し、東南アジアで唯一、日本研究の博士号を授与するインドネシア大学大学院日本地域研究科では、初めての経営学博士を輩出した。

海外事務所報告

タイ

バンコク日本文化センター

1. 概況

2001年総選挙により、議会における圧倒的多数を得たタクシン首相率いるタイ愛国党は、その後2003年3月には連立の枠組みを変更しつつ、議会における勢力を365議席(73%)まで伸ばし、それを背景にトップダウン型の政策を推進している。

こういった状況のなか、2003年10月には、APEC(Asia-Pacific Economy Cooperation)首脳会議がバンコクのチャオプラヤ河畔の国際会議場において行なわれ、経済問題やテロ対策・安全保障問題などが議論され、首脳宣言として貿易・投資の自由化促進、人間の安全保障の強化などが採択された。

経済面では、アジア経済危機の後、内需刺激策や生産拡大が経済の堅調な成長をもたらし、外面的には中止していたビル建設工事の再開や中心地サイアム駅北側の大規模工事など活況を呈している。

文化面では、タイ観光庁が昨年「2003年バンコク国際映画祭」に引き続き、「2004年バンコク国際映画祭」を開催し、150以上の作品が5か所の会場で上映され、大きな話題となった。

文化・教育関係行政のトピックとしては、2003年7月に組織改革に係る新法が公布され、これにより旧教育省、大学庁、国家教育委員会が合併され新教育省となった。中央行政局では、主に全体の方針や戦略策定、地方行政区の支援などを行ない、各地方行政区では中央の方針に沿った教育行政が実施されることとなった。

2. 日本との文化交流事業

2003年度における日本とタイとの文化交流事業における最大のトピックは、2003年日本ASEAN交流年である。タイにおいて開催された日本ASEAN交流年認定事業は74件(外務省調べ)、う



JASEAN POPs
有里知花とプライオニー(日・タイ イメージソング歌手)



J-ASEAN POPsバンコク公演

ち12件の文化交流事業はバンコク日本文化センターが主催または共催したものであった。12件の事業は、いずれもタイテレビ局の取材を受け、「質の高い文化交流事業を実施する国際交流基金」を印象付けた。

大型舞台公演は、エイジアン・ファンタジー・オーケストラ・ツアー2003(6月)、オペラシアターこんにやく座アジアツアー2003「セロ弾きのゴーシュ」公演(7月)、ダムタイプ「メモランダム」バンコク公演(9月)、J-ASEAN POPsバンコク公演(10月)、水と油「見えない男」公演(11月)というように、連続して実施することでメディアの協力により、高い観客動員率を得られ、広報上の相乗効果が高かった。

今後の日本文化紹介・芸術交流事業において基金が果たす役割は、当地の舞台芸術関係事業の成熟度から考えれば、ますます大型化していくと予測されるが、周年事業実施年度における基金の役割も、単独主催または共催型から、「他機関との連携」型に変化していくものと思われ、プロデューサー的役割よりも、コーディネーター的な役割がより期待され、日本側団体とタイ側団体をマッチメイクしていく業務が主流となると考えられる。

3. バンコク日本文化センターの活動

<活動方針>

タイの国際・国内・文化関係にみられる動きのうち、ASEAN加盟国間の結束の強化および北東アジアとの有機的連携、地方分権化の推進と教育制度の改革、「タイらしさ」を追求した新しい文化活動と伝統文化の見直し、ならびにバンコク日本文化センターのこれまでの活動実績をふまえ、以下の活動をした。

- ・センターの各事業の存在感を増し、日・タイおよび日・インドシナ地域の文化交流の中核機関としての存在を内外にアピールするために、ホームページ機能の強化など情報発信力を高める。
- ・地域としての取組みが要請される課題に対し、日・タイおよび日・インドシナ地域が対処していくことを知識層から草の根レベルにまで積極的に支援する。とくに、インターメディアリー機能として、日・タイの文化交流の情報提供・活動に対する協力、政府関係機関やNGOによる社会貢献活動に対する協力、知的交流事業を促進する観点や地方展開も考慮した。日本研究分野では、従来の双方向的な形態の事業を支援するとともに、地域研究との連携を推進した。
- ・日・タイおよび日・インドシナ地域の芸術家ネットワークを構築していく前段階として、タイ国内の芸術活動を支援した。とくに、センター施設であるアート・ギャラリーやホールを

一層オープンにし、先駆的な芸術交流事業への支援、国際交流基金フェロー経験者の滞日成果発表の機会提供、日・タイのコラボレーション事業を実施した。

- ・本部事業の地方展開など地方・近隣国との連携に留意した事業を実施した。
- ・日本語事業においては、中等教育機関などに対する支援を引き続き行なうとともに、最近活発化しつつある現地の日本語教師会の活動を支援した。

<2003年度事業例>

・J-ASEAN POPsバンコク公演(2003年10月26日)

日本ASEAN交流年2003年記念事業として、「J-ASEAN POPs Concert Thailand 2003公演」を、国際交流基金とGMMグラミー社の共催のもと、在タイ日本大使館の協力、タイ航空等の協賛を得て、インパクトアリーナにて開催した。日本から有里知花(イメージソング歌手)、ジャニーズJr.、新田昌弘(三味線奏者)が、タイからブライオニー(タイ版イメージソング歌手)ほか多数の人気アーティストが参加し、約7,000人の観客が集まる盛況となった(敬称略)。

・中等教育機関(後期)学習者向け日本語教科書『あきこと友だち』制作出版

2000年度よりタイ国内の高等教育機関、中等教育機関教員およびセンター講師らによる執筆委員会によって制作が進められてきた日本語教科書『あきこと友だち』が完成した。この教科書はタイの中等教育機関後期課程3年間で1週間に6コマの授業があるコースを対象に開発されており、6分冊の本冊、ワークブック、教師用指導書、テープで構成されている。各学年の前期分にあたる奇数巻の市販が2004年3月から開始され、店頭販売されることとなった。

・タマサートおよびチュラロンコン大学日本研究修士課程合同セミナー(2004年3月24日)

タイの有力大学であるタマサート大学およびチュラロンコン大学は、早くから日本研究に取り組み、それぞれ1997年、1999年に日本研究修士課程を開設した。両大学院修士課程修了者は各界で活躍しているが、今回、同課程修了者および関係者を集めた日本研究セミナーがタマサート大学において開催され、当センターより経費を助成した。セミナーでは、両大学の主要な日本研究者が顔をあわせ、タイにおける日本研究の歴史を振り返った後、個別の研究発表、また今後の日本研究のあり方についての議論が行なわれた。本セミナーは初めての試みであり、今後も継続して実施することで両大学研究者の今後の関係作りに資するものと期待される。



日本語教科書『あきこと友だち』



合同セミナー

インドネシア

ジャカルタ日本文化センター

1. 概況

国内の治安面では、2002年10月にバリ島で発生した爆弾テロ事件に引き続き、2003年8月には12人の死者を出す爆弾テロがジャカルタの米国資本系の高級ホテルで発生した。その直後、複数のビルなどに対して爆弾予告事件が多数発生し、センターが入居しているビルにも数回爆弾予告があった。一方、地方の情勢に目を向けると、インドネシア政府と独立派組織「アチェ自由運動」(略称GAM)との和平協議が不調に終わり、5月にはナングル・アチェ・ダルサラーム州に軍事非常事態宣言が発令され、国軍による自由アチェ運動(GAM)に対する統合作戦が開始された。この戦闘により、自由アチェ運動側、国軍兵士や警察官、多くの市民が犠牲になるなど、依然として国内の治安情勢は不安定な状況であった。

社会面では、2004年7月5日に実施予定のインドネシア史上初の正副大統領直接選挙の前哨戦として、4月5日の投票日に向けて、国会議員/地方議員総選挙キャンペーンが3月11日より各地で繰り広げられることとなった。

国際関係においては、10月に第9回東南アジア諸国連合(ASEAN)首脳会議がバリなどで開催され、安保共同体、経済共同体、社会・文化共同体の3つの共同体設立を柱とする「ASEAN協和宣言II」を採択し、2020年を目処にASEAN共同体の建設という目標に向け、行動計画の建て直しを行なった。

2. 日本との文化交流事業

2003年は日本ASEAN交流年ということで、年間を通して各種文化交流事業が実施されたが、7月にはその一環として、ジャカルタを中心に「日本インドネシア友好祭」が開催された。2002年9月に官民合同の「日本ASEAN交流年・インドネシア年間実行委員会」が設置され、この実行委員会が中心となり、合計30以上の公演、展覧会、映画上映会、市民交流事業、フェスティバル、弁論大会、スポーツ交流事業、各種セミナーやシンポジウム等が実施された。

ジャカルタ以外の地方都市をみると、例えば、東ジャワ州スラバヤ市においては、同市と姉妹都市関係にある高知市との市民レベルでの交流を深めるために、「第1回スラバヤ・よさこい祭り」が開催された。

欧米諸国と比較すると当地における市民レベルでの文化交流

は未だ盛んであるとは言えないが、姉妹都市関係を結んでいる州・都市を中心に、市民レベルでの文化交流活動が徐々に増えてきているといえよう。

3. ジャカルタ日本文化センターの活動

<活動方針>

- ・「日本ASEAN交流年2003」に関する取り組み
- ・一般市民への文化情報発信の強化

広報媒体を通じてセンターの更なるプレゼンス強化、年間約3万人の来館者を誇るセンター図書館のサービス充実、「スクールビジット」事業の積極的な展開を図った。

- ・日本研究、知的対話支援における対象分野の拡大

各種「文化人講演会」の開催、イスラム系大学における日本文化紹介事業の積極的な展開、日本研究振興の一環として、当地の高等教育機関における日本研究センター間の連携強化に取り組んだ。

- ・現地文化振興事業

現地側が主体となつて行なう日本文化理解促進のための各種事業に対する支援、また、現地文化振興事業に対する支援を行なった。とくに、プリティッシュ・カウンシル等の外国文化機関と連携して現地の若手芸術家や知識人を支援した。

<2003年度事業例>

- ・「日本インドネシア友好祭」(2003年7月1日~31日、ジャカルタ)

当友好祭期間中、センターは、日本語弁論大会一般の部全国大会、生花展、日本インドネシア児童画展、日本映画週間、第5回/第6回アジア漫画展合同展、じゃかるた新聞杯国際囲碁大会、「つるとかめ」津軽三味線コンサート、オペラシアターこんにゃく座公演等の多様な事業を実施した。

「つるとかめ」津軽三味線コンサートにおいては、津軽三味線奏者の澤田勝秋氏、民謡歌手木津茂理氏率いる「つるとかめ」と、ムラコ島の伝統音楽をベースに現代的なアレンジを加えて海外でも評価の高い、当地の現代音楽グループ「ニュー・インドネシア・アンサンブル」とのジョイントコンサートを実施し、友好祭の締めイベントとしての位置付けもあり、インドネシア社会のみならず在留邦人からも大好評であった。

オペラシアターこんにゃく座公演は文化庁アーツ・プラン21の助成等を受け、センターが現地のコーディネートをこなすという協力体制のもと実施した。こんにゃく座の公演は当地では2回目であったこともあり、前評判も高く、連日9割の観客動員があり好評であった。

● J-ASEAN POPsジャカルタ公演(2003年10月22日、ジャカルタ・コンベンション・センター)

日本からはThe BOOM、高野寛、INSPi、有里知花、インドネシアからは、ダンドゥット界のスーパースターであるイヌル・ダラティスタ、今回のプロジェクトで横浜公演にも招待されたAB Threeが出演し(敬称略)、会場のジャカルタ・コンベンション・センター・プレナリー・ホールは満員の約4,000名の観客で埋め尽くされ、暑い熱気に包まれた中で無事終了することができた。コンサートの模様は当地マスメディアでも好意的に取り上げられ、観客からも好評であった。後日インドネシア国営放送にて、コンサート内容のテレビ放送が行なわれた。コンサート実施前に各種メディアと連携した関連事業を実施、当地のFM放送局で“Tokyo Beat”の放送を行ない、インドネシアのリスナーに対してJPOPsの浸透を図った。

● 2004年新カリキュラム準拠普通高校/宗教高校用日本語教科書作成プロジェクト(2003年4月1日～2004年3月31日、ジャカルタほか)

インドネシアの初等中等教育のカリキュラムは10年ごとに改訂となるが、今般、2004年の新学期より導入される新カリキュラム(基本能力重視カリキュラム)に準拠した当プロジェクトを、インドネシア国家教育省初等中等教育総局普通中等教育局との共同で開始した。2003年6月にプロジェクト全体委員会を開催した後、2003年下半年に地方6地域(ジャカルタ首都圏地区、西ジャワ州、中部ジャワ/ジョグジャカルタ特別州、東ジャワ州、バリ州、北スラウェシ州)において、それぞれの地方の高校日本語教師会から推薦された教員(各地域4～6名程度)が中心となって、2年生向けシラバス検討会議を各地区5～6回程度実施した。それぞれの地域の検討会議には国際交流基金派遣青年日本語教師が入って支援を実施。2004年1月26～31日の計6日間ワークショップを開催し、ジャカルタの普通中等教育局にて地方から持ち寄ったシラバス案のとりまとめを行なった。2月以降新カリキュラム導入時からは、シラバスの作成や教材の作成も現場の教師の努力で行なっていかなければならないが、当地の高校教員の能力や経済的問題など、自力で教材作成が難しく、適当な教材も存在しない状況であるため、基金からの専門家・青年日本語教師による技術的な支援と経費的支援が不可欠となっている。

マレーシア

クアラルンプール日本文化センター

1. 概況

2003年のマレーシアを特徴づけたのは、第1に経済の持続的な成長である。通年の貿易収支は、電子・電気産業が牽引し750億4,000万リンギの黒字となり、日本など従来の主要貿易国に加え、中東、中・印向け輸出が20%～40%台の成長となった。民間消費支出、投資誘致額などの好材料も加え、マレーシアの2003年経済成長率は、実質で政府予測の4.5%を凌ぐ5.2%になった。但し、マレーシアの観光産業では、外国人観光客の入国者総数が2000年に1,000万人を突破し、2002年には1,330万人(日本人観光客35万4,500人)に達したが、2003年は、SARSとイラク戦の影響で1,050万人に減少した。国際的には非同盟諸国会議(NAM)の首脳会合や、世界最大のイスラム教組織のイスラム諸国会議機構(OIC)の閣僚会議・首脳会議を開催し、国際的アクターとしての役割も果たした。また、2003年は政権交代の節目の年でもあった。1980年7月から2003年10月まで政権を担当したマハティール首相は、ルック・イースト政策を継承するアブドラ・バダウィ新首相にバトンタッチした。

2. 日本との文化交流事業

23年に及ぶ東方政策で培われた日馬関係を背景に、2003年度の日本・マレーシアの文化交流事業は、日本ASEAN交流年記念事業の実施年として、特筆すべき各種事業が行なわれた。総事業件数740件(2003年末)のうち、マレーシアでは86件が開催され、これはインドネシアの93件について2番目に多かった。国の総人口からするとインドネシアが約2億2,000万人、マレーシアが約2,400万人であり、開催件数を対人口比で見ると記念事業は統計上マレーシアで極めて高いウェートを占めた。

とくに、2003年6月は、日馬両国の合意によりマレーシアの担当月間となった。この期間に行なわれた記念事業のうち、全事業にわたり在馬日本大使館および在馬日本公館の全面的な支援を得て、国際交流基金の事業が約半数を占めた。



日本語教育セミナー

3. クアラルンプール日本文化センターの活動

<活動方針>

2003年度事業では、文化交流事業を通じ東方政策を遂行するマレーシアとの友好関係にさらなる貢献をすることを配慮しながら、次の活動方針をもって臨んだ。

- ・日本ASEAN交流年の記念事業の実施
- ・日本・マレーシア文化交流の中核的推進団体の育成
- ・マレーシア東方政策による人材育成を目的とする日本語予備教育の支援
- ・マレーシア日本語教育の中核となる人材育成
- ・マレーシア日本語教育の現地化と自立化に必要なネットワークの強化
- ・日本研究とアジアセンター事業の支援
- ・芸術交流推進のための現地施設の有効利用およびノウハウの提供
- ・現地の展示・公演団体の活動支援

<2003年度事業例>

●日本語教育セミナー

2004年からマレーシア教育省によって開始される中等教育シラバス改定作業への側面支援を行なうことも考慮し、2003年は「教科書とシラバスを考える」と題して実施した。近隣国における中等教育レベルのシラバス作成の実情を知るため、オーストラリアおよびタイから講師を招き、実際のシラバス作成作業の際に直面した問題や課題等、具体的・実践的な内容とした。

また、併催した分科会では、マレーシアにおける教科書作成および利用法の実情について、中等教育・高等教育・予備教育・民間教育機関の教師が発表した。従来、この分野では横断的な情報交換が活発でなく、参加した教師には多くの実践的なヒントを共有する機会となった。

●JASEAN POPsクアラルンプール公演

6月25日、日本ASEAN交流年の記念事業のメインイベントとして、在マレーシア日本大使館の後援、マレーシア航空の協力を得て、マレーシア国営放送(RTM)と国際交流金の共催で行なわれた。コンサートの事前情報は、新聞・ラジオ等で大々的に取り上げられ、日本・マレーシア両国の人気アーティストの参加とあって、会場となったマレーシア国営放送の前には、早くから来場者の列ができた。マレーシアの各紙報道は、上田正樹とニン・バイズーラ、有里知花とシティ・ヌルハリザ(敬称略)など、日馬両国歌手による歌の共演に高い評価がなされた。コンサートの模様は、後日、RTMの第1チャンネルで、マレーシア全土に放映され日馬交流史に残る特筆すべきイベントとなった。



J-ASEAN POPs クアラルンプール公演

●日本アニメ映画祭

クアラルンプール、ペナン、コタキナバルで、1950年代から90年代にかけてのアニメ映画の代表作を上映し、日本アニメの過去50年の変遷を紹介した。マレーシアでは一般にアニメへの関心が高く、クアラルンプールの会場となった国立博物館には、新聞報道を見た遠方からのアニメファンも含め、5日間で合計2,000名を上回る観客が入場した。この映画会の開催には、一般の入場者に加え、マレーシア・アニメーション協会の協力で、アニメ制作の関係者も足を運んだ。日本アニメに対して、人々の関心と評価はきわめて高く、上映作品を連続して見ていく人が多かった。また、クアラルンプール日本文化センターの存在さえ知らなかった入場者が多数いたため、印刷物やアンケート用紙を配り、文化センターへの現状認識と今後の活動に対する要望の取りまとめを行なう機会にもなった。

フィリピン

マニラ事務所

1. 概況

2003年、アロヨ大統領が次期大統領選挙への出馬の意向を次第に明らかにしたのに対し、11月下旬、人気映画俳優のフェルナンド・ポー・ジュニア氏が立候補を正式表明したことで、政局の関心は2004年5月の大統領選挙に向けて一挙に高まった。

この間、ダバオ空港での爆弾テロ(4月)、マニラ首都圏中心部での国軍クーデター未遂事件(7月)などが発生、アロヨ政権にとっての課題である治安問題の解決には進展が見られなかった。

イラク戦争やSARSの影響、治安問題、更に次期大統領選挙を巡る政治的混乱などの懸念材料により、ペソの対ドルレートは弱含みに推移した。

2. 日本との文化交流事業

日本ASEAN交流年である2003年には、東南アジアを巡回する企画をたてた劇団が多く、それらがフィリピンにも立ち寄りて公演を行なうことがしばしばあり、好評を博した。オペラシスターこんにゃく座による「ゼロ弾きのゴーシュ」、劇団影法師による「プリズム」の公演がその一例である。



日本アニメ映画祭

例年2、3月に開催される日比友好祭では、2003年度については大使館の呼びかけに応え、当地で活動するNGO団体などが共同して事業を行なおうとする新しい動きをみせて注目された。

若者層には、日本のテレビ・アニメーションによる日本語への関心の高まりがみられ、他方、日本との貿易自由化協定交渉を睨み、実用的な日本語教育の必要性も叫ばれるようになり、具体的な検討が各方面で進むようになった。

2003年冬封切の『ラスト・サムライ』は、当地でも多くの観客を集め、日本の伝統的な価値観に対する関心も高まった。

3. マニラ事務所の活動

<活動方針>

フィリピンから日本への入国者数は、東南アジア地域で最大であり、今後も関係が緊密化することが見込まれることから、互いに良いイメージが形成されるよう、以下に留意して事業を行なった。

- ・従来からの日本語教育支援に加えて、IT技術者や看護・介護など新しいニーズへの対応も視野に入れ、研修の充実に努める。
- ・若年層にアピールする映画などによる文化紹介事業とともに、舞台芸術分野などでの日比双方の共同作業・交流を深める。
- ・明るい日本のイメージ形成のため、日本の「笑いの文化」の紹介に努める。
- ・当地NGOを支援し、多様な分野において東南アジア地域全体との交流を視野に入れた事業の促進に努める。

<2003年度事業例>

- ・英語落語(2003年8月、CAP ディベロップメント・アートセンター/セブ市、フィリピン大学・フィリピン文化センター/マニラ首都圏)

大島希巳江氏プロデュースによる英語落語(笑福亭鶴笑、桂あさ吉、桂かい枝、林家和女)の公演をセブ、マニラにて行なった。(敬称略)

大島氏による落語の紹介、それぞれの落語家による英語落語のほか、紙きり・珠簾等の芸の披露では聴衆も参加し、満員の観衆の間に笑いと拍手が絶え間なく続いた。とくに文化庁の文化交流使に認定されている鶴笑氏がひざやすねにつけた人形を操る「パペット落語」は大好評であった。

「英語落語」は、英語力が高く陽気な国民性のフィリピンにおいては、非常に有効な事業であり、日本の「笑いの文化」の紹介に役立ったと言える。



英語落語

- ・日本語教師のためのイメージン・ウィークエンド(2003年9月19日~21日、エンリコ・ロベス・センター/アンティポロ市)

本企画は日本語教師相互の親睦を深める機会の提供、ネットワーク形成促進、教授現場の課題に対する問題意識の開発を目的とし、基金日本語教師研修生および拠点大学所属教師に対象を絞って実施した宿泊研修である。2泊3日の日程で、マレーシアから招へいた日本語教育指導者養成プログラム修了者2名の研究発表、フィリピン大学教育学部カリキュラム開発専門家による特別講演、フィリピン人ファシリテーターによるグループ討議、フィリピン人日本語教師懇談会、教室活動のアイデア・シェアリングなどを行ない、フィリピン人日本語教師16名が参加した。

この研修では日本語教育指導者養成プログラム第1期生が牽引役となり、フィリピン人教師の主体的・自律的な参加を促すことができた。今後の自主的な研さんに繋がることが期待される事業であった。

- ・日本映画祭(2003年9月~10月、フィリピン文化センターほか/マニラ首都圏、2003年11月、アヤラセンター/セブ市、2004年3月、フィリピン大学ほか/マニラ首都圏)

本年度前半の映画祭では、日本ASEAN交流年事業の一環として、北野武監督の作品7本(『菊次郎の夏』『HANA-BI』『その男、凶暴につき』『ソナチネ』『あの夏、いちばん静かな海』『キッズ・リターン』『34 X 10月』)と『サザン・ウィンズ』をはじめASEAN諸国の映画5本を上映した。北野監督が『座頭市』によりベネチア映画祭で銀獅子賞を受賞したのと重なり、新聞をはじめ多くのメディアに取り上げられた。

2004年3月の映画祭は日比友好祭事業の一環として実施し「サムライ映画特集」として『椿三十郎』(黒澤明監督)、『座頭市物語』(三隅研次監督)、『風林火山』(稲垣浩監督)、『雨あがる』(小泉堯史監督)、『ジャズ大名』(岡本喜八監督)の5本を上映した。『ラスト・サムライ』が公開された後ということもあり、多くの観客が日本映画に描かれた「侍」の姿を堪能した。



日本語教師のためのイメージン・ウィークエンド
研修風景